

自然遊学館

だより

2017 SPRING

No.83



汽水ワンド斜面の桜

近木川河口の汽水ワンドの斜面に植えられた桜は、まだ小さいですが、春には斜面をピンクに染めます。年数が経っていくと、ますます見応えのある桜に育っていきそうで楽しみです。

2017.4.30 発行 貝塚市立自然遊学館

目次

*行事レポート

春の七草摘みハイキング …… 白木江都子… 1

打ち上げ貝拾い …… 山田浩二… 3

平成28年度海の学び報告会…… 高橋寛幸… 5

千石荘&近木川河口バードウォッチング
…………… 和田太一… 6

*泉州生きもの情報

フキ …… 岩崎拓… 8

貝塚市脇浜の住宅跡地で見つけた貝殻
…………… 西出康介・山田浩二… 10

4 本腕のトゲモミジガイ …… 山田浩二… 11

*館長コーナー

来館者からの質問 …… 高橋寛幸… 11

*いきものがかり

遊学館で飼育している生きもの10 …… 鈴子勝也… 14

*特別展報告

2016年の自然遊学館の出来事 …… 岩崎拓… 15

*調査速報

二色浜周辺の鳥調査4 …… 鈴子勝也… 17

千石荘昆虫調査 2016 …… 岩崎拓… 18

*寄贈標本 …… 20

*スタッフ日誌 …… 23

行事レポート

春の七草摘みハイキング

日時：2017年1月4日(水)10:00~13:00

場所：蕎原ほの字の里周辺

参加者：22人

風はなく太陽がふりそそぎ、数日前から「極寒注意」と言っていた天気予報は大外れ、昨年に続き今年もまた、防寒具を脱ぎたくなるほどのいいお天気でした。

10時、集合地のほの字の里グラウンドに白紙を広げ、予め採集しておいたセリ・ナズナ・ハハコグサ・ハコベ・コオニタビラコに名前を付けて並べ、ごぎょう・はこべら・ほとけのざ、という昔の呼び名には触れずに説明しました。セリとハコベは、冬季でも成葉を付けているので分かりやすいのですが、ナズナとハハコグサとコオニタビラコは、個体がまだまだ小さく、似たような形の植物が多くて見分けがつき難いです。



少し離れた場所に七草と間違えられやすい植物、タネツケバナ、イヌガラシ、タンポポ、オランダミミナグサ、チチコグサモドキ、オニタビラコ、キュウリグサ、なども並べて、見比べてもらいましたが、他

の多くの植物と混生している実際の田畑では、なかなか見分けられないと思います。

一通りの説明を終えて出発、長らく放置されている田んぼの跡地で、セリとナズナとハコベを探してもらいました。他の植物に混じって生えるハコベを見つけることは意外と難しいようで、各植物の違いを真剣に見るいい機会です。ナズナは花や実を付けている個体がたまにあるので、そのすぐ傍らに種で増えたロゼット状の小さなナズナを探し、葉の大きさ・形・色を確認してもらいました。



この場所は去年よりセリが増えていて、昨年少し生えていたコオニタビラコやハハコグサは、全く見つかりませんでした。セリ・ナズナ・ハコベを覚えて採集した後は、現在田畑として使われている土地で七草を探します。

下見の折にお願いして、快く許可を下さった地主の斉喜秀利さんがご一緒して下さいました。農業従事者にとっては、私たちの探すセリ・ナズナ・ハハコグサ・ハコベ・コオニタビラコは、みんな雑草で、稲や畑作物の成長を阻害するものです。斉喜さんに馴染みの雑草は、私たちの使う正式

名（標準和名）すら耳慣れないらしく、「そんな名前が付いているのか」と、いちいち感心して下さいます。「昔あまり見なかった雑草に、この頃は困らされている」と、イヌガラシ・ナズナを、田畑以外ではノキシノブを挙げられました。特にイヌガラシは、アブラナ科植物ですから根が地中に深く長く入っていて、畦や擁壁沿いに生えた時は、耕耘機泣かせだそうです。「ホント、いっぱい生えていますね」とよく見てみたら、イヌガラシだけではなく、スカシタゴボウも混じっていました。イヌガラシの果実は細長くて、生育初期の葉の切れ込みは少ないのですが、スカシタゴボウは果実が太短く、生育初期の葉の切れ込みは深いです。果実がないと見分けにくいので、斉喜さんには、2種ともがやっかいな雑草に違いありません。また、最近の乾田化や池湿地が少なくなったことにより、比較的乾いた土地を好むナズナが、勢力を増してきたと思われまます。ノキシノブが増えたのは、放置された小屋や石垣が多くなったからではないでしょうか。

蕎原以外の場所では、なかなか手に入りにくいコオニタビラコは、斉喜さんの田んぼの擁壁沿いに、田んぼの土に半ば埋もれながらたくさん並んでいます。目が馴れるまで、どれがコオニタビラコかは判別が難しく、キュウリグサやタネツケバナや、少し馴れてきてもトキワハゼを抜いて見せに来る人が多いです。たくさん生えているので、時間が経つと正解率が上がってきて、全員がコオニタビラコを採集できるようになります。コオニタビラコは小さい植物なので、斉喜さんは今日まで気にも留めて

おられなかった「雑草」のようです。

「斉喜さんの田んぼがあるから、コオニタビラコは採集できます。近ごろは農機具がよくなって、田んぼの隅々まで耕してしまうので、コオニタビラコはどんどん減っています」と申しますと、「擁壁と田んぼの土の間に隙間（溝）ができると、そこから田んぼの水が漏れるので、なるべく擁壁の際々まで耕耘機で耕す」とのこと、田んぼが土で囲まれていた頃はそんな心配はなかったのだろうと、他の田んぼでコオニタビラコが見あたらない訳も納得しました。

庭や道端に普通に生えるハハコグサが、蕎原ではいつも見つかり難いです。斉喜さんの畑でも、先ほどの説明のように畦ぎりぎりまで耕耘機が耕すからでしょうか、長い畦道の土をしっかりと見つめながら歩き、大人でも真剣に探さないと見つかりません。



ハハコグサ

下見の折に幾つか見つけていたので、始めに見つけたハハコグサの傍に割りばしを刺し、「これと同じものを探して下さい」と列の後ろまで伝えてもらうように

しました。子どもたちが「これですか」と持ってくるものは、ほとんどオランダミミナグサの芽生えでしたが、ハイキング気分で畦道をウロウロしているうちに、たいていの方がハハコグサを見つけられたようでした。

13 家族の全員が、自力採集した七草のうちの 5 種類をポリ袋に入れ、七草粥の大鍋が待つ暖かい室内に向かいました。お代わり自由の七草粥をお腹いっぱいいただき、自然遊学館で育てられたカブラとダイコンの葉を加えた七草を前にして、明日の朝、俎の上に乗せ、「七草なずな 唐土の鳥が日本の土地に 渡らぬ先に」と囁し立てながら、包丁をトントン響かせて刻み、古くからの伝統を伝えて行って下さいとお願いし、行事を終了しました。今年の参加者は、みんなよく話を聞いて下さり、熱心な方ばかりでした。

下見時、行事当日ともに、特に新しい植物には出会いませんでした。

(白木 江都子)

打ち上げ貝拾い

日時：2017 年 2 月 4 日 (土) 13:00~15:30

場所：近木川河口右岸前浜

参加者：53 人

近木川河口の前浜に打ち上がる貝殻を拾い集め、どんな種類かを記録し、壁飾りを制作する行事です。寒い日が続いていましたが、行事当日は幸いにも暖かな日差しが降り注ぐなか、実施することができました。

昨年同様に講師として日本貝類学会所属の児嶋 格さん、大古場 正さんに来て頂きました。

右岸側の前浜は高い堤防があり、人がほとんど入らない場所なので、手つかずのまま、打ち上げ物がたくさん溜まっています。多くの枯れ枝や空き缶、プラスチックごみをかき分けると、貝殻やウニ類の殻、カニの脱皮殻などを見つけることができました(図 1)。長さが 20 cm 程あるココヤシの木の実もどこから流されてきたのか見つかりました(図 2)。貝殻は例年通り、アサリ、マガキが最も見かける種類でしたが、今回はクチバガイがとても増えたような印象を持ちました。



図 1. 近木川河口右岸で貝殻拾い

小一時間の収集の後、拾い集めた貝殻を館に持って帰りました。団体で参加されていた 20 人は 1 階の多目的室で、さっそく貝殻を紙皿に貼りつけた壁掛け作りに取り掛かり、一般参加の方々も 2 階の会場で拾い集めた貝殻を整理し、種類について講師から教えて頂きました。出現した海産の貝殻は巻貝 19 種、二枚貝 29 種の計 48 種でした(表 1)。この観察会は 2012 年から

毎年この時期に近木川河口で実施していますが、その間で今回、初記録された種は、ツガイ、キヌボラ（図3）、ミドリイガイ、イタボガキ、チヨノハナガイ、オチバガイの6種でした。また、オキナガイは昨年引き続き見つけましたが、今回のものは軟体の残っている新鮮な死殻でした（図4）。

続いて、自分の拾った貝殻の中からお気に入りを選んで紙皿に貼っていき、それぞれの貝殻に種名シールをつけた壁飾りを制作しました（図5、6）。



図2. ココヤシの実



図3. キヌボラ



図4. オキナガイ

表1. 観察会で確認した打ち上げのリスト

グループ		和名	2017/2/4 33人
腹足綱	ヨメガカサガイ科	マツバガイ	rr
	ユキノカサガイ科	コウダカアオガイ	rr
	ニシキウズ科	コシダカガンガラ	rr
		インダタミ	r
		チグサガイ	rr
	アマオブネガイ科	イシマキガイ	r
	タマキビ科	マルウズラタマキビ	r
		タマキビ	rr
	カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ	c
	タマガイ科	ツメタガイ	c
		ネコガイ	rr
		ツガイ	rr
	アッキガイ科	イボニシ	r
		アカニシ	r
	フコロガイ科	ムギガイ	r
	ムシロガイ科	アラムシロ	r
		キヌボラ	rr
	ブドウガイ科	ブドウガイ	rr
	カラマツガイ科	カラマツガイ	rr
	二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ
		サルボウガイ	c
イガイ科	ムラサキイガイ	r	
	ミドリイガイ	rr	
	ホトギスガイ	c	
ハボウキガイ科	タイラギ	r	
イタヤガイ科	イタヤガイ	rr	
ナミガシワ科	ナミガシワ	c	
イタボガキ科	イタボガキ	rr	
	マガキ	cc	
ザルガイ科	トリガイ	r	
バカガイ科	バカガイ	r	
	チヨノハナガイ	rr	
チドリマスオ科	クチバガイ	c	
ニッコウガイ科	サクラガイ	r	
	ゴイサギ	rr	
	ヒメシラトリガイ	r	
シオサザナミガイ科	オチバガイ	rr (L)	
	イソシジミ	r	
マテガイ科	マテガイ	r	
フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	rr	
イワホリガイ科	セミアサリ	rr	
	ウスカラシオツガイ	r	
マルスダレガイ科	カガミガイ	rr	
	アサリ	cc (L)	
	イヨスダレ	rr	
オオノガイ科	オオノガイ	r	
キヌマタイガイ科	キヌマタイガイ	rr	
オキナガイ科	オキナガイ	rr (L)	
淡水産	リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	c
	シジミ科	タイワンシジミ	rr
陸産	アズキガイ科	アズキガイ	rr
	キセルガイ科	ナミコギセル	rr
	ツムガタギセル	rr	
オナジマイマイ科	ウスカワマイマイ	rr	
甲殻類	ミョウガイ科	カメノテ	rr
	フジツボ科	タテジマフジツボ	rr
	ザリガニ科	アメリカザリガニ	rr
	ホンヤドカリ科	ヨモギホンヤドカリ	rr
	ガザミ科	タイワンガザミ	rr
	モクズガニ科	モクズガニ	r
		ケフサイソガニ	r
	ヒライソガニ	rr	
ヒトデ類	モミジガイ科	モミジガイ	rr
ウニ類	サンショウウニ科	サンショウウニ	r
	ヒラタアンプク科	オカメアンプク	rr
多毛類	カンザシゴカイ科	カンザシゴカイ類の棲管	r
ホヤ類	シロボヤ科	シロボヤ	rr
魚類	フグ科	クサフグ	rr
計			68

凡例：数量……cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数 軟体確認……(L)



図 5. 貝殻の壁飾り制作の様子



図 6. 貝殻の壁飾り

(山田 浩二)

海の学びミュージアムサポート事業 平成 28 年度海の学び報告会

日時: 2017 年 2 月 11 日 (土) 13:00~16:00

場所: 貝塚市立自然遊学館 多目的室

参加者: 28 人 (一般 19 人、スタッフ 6 人、
来賓 2 人、講師 1 人)

最初のイベント、スナメリ剥製の除幕式、白い布が引き落とされると、「オー！」という歓声が起こりました。その余韻を残したまま報告会が始まりました。

来賓あいさつの後、海の学びの行事やス

ナメリ学習会の参加者から感想や意見が述べられました。



行事参加の感想を報告

スナメリが大好きだったので、スナメリ学習会に参加して良かった。等々、積極的な意見が交換されました。

その後、中学生と高校生の研究成果が報告され、休憩時間にはスナメリ剥製や分離骨格標本をじっくり見てもらいました。

報告会の最後に大阪府環境農林水産総合研究所の日下部講師からの講演と全体のまとめをしていただきました。講演の最後には、『海で遊んで、海を知って、海の生きものと友達になる』と締めくくられました。



中学生による調査・研究成果の報告



高校生による生きもの調べの結果の報告



引き込まれるように展示物を見る参加者



講演の様子

(高橋 寛幸)

千石荘 & 近木川河口

バードウォッチング

日時：2017年2月18日(土) 10:00～15:30

場所：千石荘、近木川河口

参加者：43人

昨年は雨で中止になったバードウォッチング行事でしたが、今年は雨も降らず開催することができました。午前の部は10時にこすもすの里バス停に集合し、千石荘で里山の鳥を観察しました。まずは下原池でダイサギやアオサギなどを見ながら双眼鏡の使い方を練習してスタート、サギ類は池だけではなく後ろの林の木の上にも何羽もとまっているのが見つかりました。

スタートして最初の千石荘養護学校跡地に向かう道では、以前はアオジやシロハラなどの地面で餌をとる小鳥たちが道端に出てきている姿がよく見られましたが、最近になって車や人の通りが増えたためか、今年はほとんど見られませんでした。

カンコ池に着くと水辺から飛び立ち水辺の枝にとまるカワセミの雌の姿が見られました。カンコ池ではキンクロハジロやカイツブリが潜水して餌を探していて、上空を見上げるとハイタカがゆっくり旋回しているのが見つかりました。カラスに追われて姿を消すまでの間ゆっくりと飛ぶ姿を双眼鏡で観察しました。近くの民家の屋根にはイソヒヨドリのオスがいて、顔から背中にかけての青色とお腹の赤色の綺麗な姿をよく観察できました。

ボタン池に抜ける林内の道に入るとたくさん小鳥の音が聴こえてきました。シジュウカラやメジロが近くの木々の間を飛び交ったり、「コツコツコツ」とコゲラが枝を盛んに突いて餌を探している様子もフィールドスコープを使ってよく観察できました。ボタン池から周りの農耕地に出ると、毎年見られているカワラヒワの群れやケリの姿、そして木から飛び立つノスリ

の姿を見られた方もいました。最後にバス停に戻る道の途中ではヤマガラやエナガの混群が木々の高いところを移動していく様子も観察されました。

午後の部は近木川河口で水鳥を中心に観察しました。団体で子どもたちの参加もたくさんあり、とてもにぎやかな観察会となりました。自然遊学館から近木川河口の海岸へ出て双眼鏡の練習をしていると近くの堤防の上にイソヒヨドリがひょっこり現れ、そして上空をミサゴが飛んでくれて、皆さん見れてラッキーでした。フィールドスコープで河口の方を見ると、浜に上がって休むホシハジロやカワウ、セグロカモメなどがとても大きく見えました。

近木川の汽水ワンドに移動すると、ヒドリガモやカルガモがみんなオスメスの2羽で行動していて、もうカップルになっているようでした。汽水ワンドの上空にトビ（とんび）が1羽飛んできて目の前をグルグルと旋回し、水面に浮かぶゴミを獲物だと思ったのか、何度も急降下して掴もうとするのが間近で見られて大迫力、急降下する度に歓声があがりました（図1）。



図1. 汽水ワンド上空で舞うトビ

近木川を上流へ歩いていくと、お目当てのカワセミが飛び、対岸のヨシの茎にとまりました。フィールドスコープで観察した後、飛ぶと背中のコバルトブルーがとっても綺麗で、子どもたちも肉眼でその姿が見れて興奮していました。



図2. 近木川沿いを歩いて鳥を探す

橋を渡り左岸の河口へ行くと、ハマシギの50羽程の群れが干潟に飛来し、群れで一斉に飛ぶ姿が綺麗でした。水際で休息や羽繕いをしているホシハジロの群れの中にスズガモのオスが1羽混じっているのも見付き観察していると、参加者から「カモは潜るのか潜らないのか？」と質問があり、その話題で盛り上がりました。主に藻類や水草などの植物を食べて暮らす潜らないカモ（ヒドリガモなど）と、主に水底の貝やカニ・ゴカイなどを潜って捕えて食べるカモ（ホシハジロなど）、そして潜水して魚などを専門に食べるカモ（ウミアイサなど）がいることを紹介して、最後のまとめをして解散しました。

今年のバードウォッチング行事は千石荘では林の道端に出てくる小鳥たちの姿が少なくなっていると感じましたが、

里山の猛禽類などは確認できて、近木川河口では汽水ワンドの周辺でいろいろな水鳥が見られ、河口では干潟のシギ類なども見られて、全体として確認種類数は多くなったと思います。

バードウォッチング 2017年2月18日

グループ	和名	千石荘	近木川	
カモ目	カモ科	ヒドリガモ	○	
		カルガモ	○	
		オナガガモ	○	
		コガモ	○	
		ホシハジロ	○	
		キンクロハジロ	○	
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	○	
		カンムリカイツブリ	○	
ハト目	ハト科	キジバト	○	
		ドバト	○	
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	
ペリカン目	サギ科	アオサギ	○	
		ダイサギ	○	
		コサギ	○	
ツル目	クイナ科	バン	○	
		オオバン	○	
チドリ目	チドリ科	ケリ	○	
	シギ科	イソシギ	○	
		ハマシギ	○	
タカ目	カモメ科	カモメ	○	
		セグロカモメ	○	
		ミサゴ科	ミサゴ	○
タカ目	タカ科	トビ	○	
		ハイタカ	○	
		ノスリ	○	
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	○	
キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	○	
スズメ目	モズ科	モズ	○	
		カラス科	ハシボソガラス	○
			ハシブトガラス	○
	シジュウカラ科	ヤマガラ	○	
		シジュウカラ	○	
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	
	ウグイス科	ウグイス	○	
	エナガ科	エナガ	○	
	メジロ科	メジロ	○	
	ムクドリ科	ムクドリ	○	
	ヒタキ科	シロハラ	○	
		ツグミ	○	
		インヒヨドリ	○	
スズメ科	スズメ	○		
セキレイ科	セキレイ	○		
	ハクセキレイ	○		
アトリ科	カワラヒワ	○		
ホオジロ科	ホオジロ	○		
	アオジ	○		
	種数	34	37	

(NPO 法人南港ウェットランドグループ
和田 太一)

泉州生きもの情報

フキ

すべての植物に等しく(?)春が訪れるはずなのに、サクラやツクシなど、春を感じさせる代名詞のように扱われる植物があります。あるいは、タンポポやオオイヌノフグリなども候補でしょうか。そんな中に、フキ(フキノトウ)もあります(図1)。いずれも何かしら目立つ色や形を持っているものです。それでもフキがややマイナーに思うのは、少ないからか、あるいは分布が山の方に偏っているからかもしれません。貝塚市内では、自然遊学館の調査結果に限りますが、馬場周辺から和泉葛城山の山頂付近までの記録があります。



図1. フキの葉
(貝塚市蕎原 2017年3月28日)
花の時期が終わった後に、地下茎の先端から葉柄を伸ばします。

フキ *Petasites japonicus* はキク科の日本原産種です。春に地下茎から花茎が伸びて、「顔」を出します(図2)。その後、花茎が伸びて、その先に花が咲きます(図3)。その株には雌株と雄株があり、雌株と雄株が別々なことを雌雄異株(しゅういしゅ)といいます。花にはおしべとめしべが

有り・・・、と習った、ふつうの両性花ではありません。雌株に咲く雌花は白色で、雄株に咲く雄花はやや黄色が掛っています（図4）。



図2. フキの芽
 (貝塚市蕎原 2017年3月23日)
 包葉が少し開いていました。



図3. フキの雄株
 (貝塚市三ヶ山 2017年3月16日)



図4. フキの雄花
 (貝塚市蕎原 2017年3月28日)
 各頭花の周辺部から咲き始めます。

その雄株に咲く雄花は形態的にはめしべもある両性花なのに、そのめしべは種子をつくる機能を失っているそうです。また、雌株に咲く花の中には、おしべのない雌花のほかにも、別のタイプの花が咲くそうなのですが、ややこしい話は、藤下先生が書かれた文章にゆずることにします（藤下、1994）。その文章の中には、「フキは元々、雌雄同株（しゅうどうしゅ：1つの株に雄花と雌花が同居する）から雌雄異株へと分化した」、「雌雄異株は草本では少ない」と書かれています。

以上、野生のフキを思って書き進めてきましたが、泉南地方は栽培フキ（大阪ふき）の産地として知られています。大阪府は全国で4番目に生産が多いそうです。栽培フキは、不稔の（＝種子が実らない）三倍体で、食用にする葉柄が長くて太いという特性を持っていて、地下茎だけで繁殖が繰り返されています（藤下、1994）。

大阪府とJAグループが1993年に定めた「なにわの特産品」の15品目の中に、水なすや紅ずいきなどとともに、大阪ふきが含まれています（2006年に21品目に拡大）。大阪府の「大阪もん」のホームページでは、フキを使った16種類のレシピとともに大阪ふきのルーツが紹介されています（http://www.pref.osaka.lg.jp/ryutai/osaka_mon/index.html）。

引用文献

藤下典之（1994）フキ。『週刊朝日百科 植物の世界 フキ メタカラコウ キオン』。1-162～164。朝日新聞社。

(岩崎 拓)

貝塚市脇浜の住宅跡地で 見つけた貝殻

貝塚市脇浜は海岸部に位置し、古くから地曳網や漁船による底曳網などの漁業が行われてきました。その後、港の整備事業で海岸部が埋め立てられ、昭和 48 年に脇浜漁協は解散しました（貝塚市、2013）。

2017 年 3 月、昔の海岸線の近くに建つ脇浜 3 丁目の民家を取り壊された跡地（図 1）の地面に、多くの貝殻が混じっているのを見つけました。



図 1. 脇浜の住宅跡地 2017 年 3 月 29 日

この土地の地主さんの許可を頂いた後、3 日間にわたって貝殻を拾ったり、掘ったりして集めました。大半がどこかが欠け、土にまみれた貝殻でしたので、自然遊学館に運んだ後、水洗いをしてから整理しました（図 2）。数量はイタボガキが一番多く、次いでサルボウガイでした。出現した貝殻で種名の判明したものは右記の通り 11 種ありました。今の二色の浜で拾える貝もありますが、ミヤコボラやテングニシなどの深場に住む貝もあり、底曳網漁が営まれていたことを裏付けるものだと思います。

巻貝

シドロガイ（ソデボラ科）
ツメタガイ（タマガイ科）
ミヤコボラ（オキニシ科）
アカニシ（アッキガイ科）
バイ（エゾバイ科）
テングニシ（テングニシ科）
ナガニシ（イトマキボラ科）

二枚貝

サルボウガイ（フネガイ科）
イタヤガイ（イタヤガイ科）
イタボガキ（イタボガキ科）
アサリ（マルスダレガイ科）

また、この宅地に建っていた家はおおよそ 80 年前に建てられたそうですので、これらの貝殻は当時の浜辺に打ち上げられた貝類相を伺い知ることにつながる記録ともいえます。

最後に、貝の種類を確認して頂いた児嶋格さんにお礼を申し上げます。



図 2. 収集した貝殻の一部
（クリーニング後）

引用文献

貝塚市（2013）貝塚市の 70 年. 290pp., 大阪府貝塚市.

（西出 康介（貝塚市立第五中学校 2 年生）

・山田 浩二）

4 本腕のトゲモミジガイ

ヒトデの仲間にはモミジガイ科というグループがあり、平たい体でモミジの葉のような形をしています。そのなかにトゲモミジガイ *Astropecten polyacanthus* という種があります。各腕の側面に上向きの棘を有するのが特徴で、普通は5本の腕を持っています。本州中部以南の浅海砂泥底に生息し、二色の浜の砂浜海岸では時おり打ち上げられているのが見つかっています。よく似た種に、腕の棘が小さくあまり目立たないモミジガイ *Astropecten scoparius* もあり、本種も二色の浜では打ち上げが確認されています。

2017年1月21日、二色の浜で4本腕のトゲモミジガイの死体を丸山幸代さんが拾われ、当館に持ってこられました(図1)。丸山さんはここ数年、頻繁に二色の浜で打ち上げ物探しを行っておられる方です。まさに手裏剣のごとく均整のとれた形の4本腕のトゲモミジガイは、初めて目にするものでした。ヒトデ類を含む棘皮動物を専門とする学芸員のいる近隣の博物館に伺ってみたところ、モミジガイ科で4腕のものは直接見たことがなく、珍しいのではないかとのことでした。二色の浜ではこれまで、イトマキヒトデで8本腕の個体が記録されたことがありましたが(山田、2003)、珍しさの点では、今回のものの方が上をいくのではと思います。

謝辞

トゲモミジガイについて情報をいただきましたきしわだ自然資料館の柏尾翔学芸員、和歌山県立自然博物館の山名裕介学芸員にお礼申し上げます。



図1. 4本腕のトゲモミジガイ

引用文献

山田浩二(2003) 8腕のイトマキヒトデ. 自然遊学館だより, No. 28:8.

(山田 浩二)

館長コーナー

来館者からの質問

毎年、自然遊学館に多くの見学者が訪れます。特に春には市内外の学校からたくさんの方の団体見学があります。

その時、遊学館への質問が寄せられます。今回の館長コーナーは過去に受けた質問の中から特に多かったものを紹介します。

『館の形』



館の入り口部分と展示ホールを含む全体の形

遊学館の建物の見本になったものがあります。見本になったアンモナイトは恐竜と同じ時代の生きものです。

そのアンモナイトの化石が蕎原で見つかり、全国的に有名になりました。この化石は館のホール入口に展示されています。



展示されているアンモナイト化石

『いつ建てられたのか』

1993年（平成5年）10月に完成しました。

『建てた場所』について

二色浜沖に埋め立て地ができ、その公園の中に建てられました。

『何のために建てられたのか』

貝塚の生き物を集め、貝塚の自然環境を理解し大切にするための情報を提供する施設として建てられました。

また、ここは二色浜に近く、近木川の河口もすぐ近くにあるため多くの生きものの調査観察ができる特徴があります。

『何をするとおころ？』

貝塚の自然を学習するところでは。

『何がありますか？』

生きものの「剥製（はくせい）」や、貝や昆虫の「標本（ひょうほん）」、魚やカニといった身近な生きものの「飼育水槽（しいきすいそう）」などがあります。

『利用する人ために工夫しているところ』

入口から順番に貝塚の自然が良くわかるように展示しています。



出入口すぐにある展示物



出入口からみた展示ホール



展示ホール奥の飼育水槽



展示ホール



展示ホール（奥から見た様子）

『休館日と開館時刻』

休館日 火曜日

開館時刻 9時～午後5時開館

月、水、木、金、土、日曜日
例外として4月～10月の土、日曜日は
午前9時～午後7時半まで開館

『一日の利用人数』

訪れる人数は1年間で5万人から6万人
なので、一日あたりにすると150人から200
人くらいになります。

この他に団体見学として利用する人も
いるので、その人数も入れるともっと増える
ことになります。

『利用するのに必要な金額』について

入館料金、団体見学ともに無料です。

『仕事』について

いろいろありますが、生きものに関する
主な仕事は以下の通りです。

貝塚の生きもの調査、団体見学の説明、
学校や現地に出かけ出前授業、生きもの飼
育、標本作り、遊学館だよりなどの報告書
作成

『働いている人』

日によって違いますが2名～4名です。
他には、行事ごとに講師の先生が来ます。
館のお掃除をする人もいます。

『小学生がはたらくこと』

小学生や中学生が働くことはできませ
んがおてつだいをしてくれる小学生がい
ます。学校の授業として仕事体験に来る人
もいます。

『部屋の数』

展示室	3部屋	多目的室	1部屋
事務室	1部屋	研究室	1部屋
資料室	1部屋	倉庫	2部屋
トイレ	男子用と女子用と身体障害者用		

『利用できる人』

大人から子どもまで、誰でも生きものを見たい人が利用できます。見学に来る人たちは大阪や兵庫、京都、和歌山の人もいます。最近になって海外から見学に来る人もいました。

『自然遊学館の行事』

動植物の観察会としていろいろな生もの調べの行事をしています。トンボの池の観察や調査は「自然遊学館わくわくクラブ」がしています。夏休みの自由研究（生物関係）の相談もしています。詳しくは自然遊学館の年間行事予定表をご覧ください。

『スナメリ』剥製のことをお知らせします。



新しく増えたスナメリ剥製

昨年（平成 28 年）1 月 7 日（木）午後、二色南町の二色浜海浜緑地公園事務所からスナメリの死体が漂着しているとの情報が当館に入りました。当館ではこのスナメリを剥製にして展示しています。まだの方は是非お越しいただき、ご覧ください。

（高橋 寛幸）

 いきものがかり

遊学館で飼育している生きもの 10

今回で、10 回目の「遊学館で飼育している生きもの」、2 年半書いてきましたが終わりが近づいてきています。皆さんに楽しんで学んでもらえるように頑張って書いていこうと思います。

今回は「カワアナゴとドンコ」と言うハゼの仲間（ハゼ亜目）を紹介していこうと思います。

カワアナゴは、茨城県以南、本州太平洋側、四国、九州に分布しています。

体が円筒状で、全体が黒いものから、背面だけが明色のものまで体色は変化に富み、河川の汽水域から、下流域に生息します。岩の隙間などを好み主にエビや小魚を食べます。自然遊学館で飼育しているカワアナゴには、冷凍赤虫をあげています。



カワアナゴが穴に隠れている

次にドンコは、愛知県・新潟県以西の本州、四国、九州に分布しています。

体は暗色で、第 1 背びれ、第 2 背びれの下部分に黒色斑があります。川の上流域～中流域の流れや緩やかで深みのある場所に住んでいます。野生では、エビや魚などを食べます。自然遊学館で飼育しているドンコは、肉食性の固形物を食べています。

水面から、落下していくときに食べて、底に落ちてしまうと食べないようです。



エサを欲しそうに見ているドンコ

(鈴子 勝也)

1月7日にスナメリの漂着があり、振り返ってみると、そこから1年が回り始めたような気がします。そのスナメリが剥製になり、会場の多目的室の中央に展示されました(図1)。



図1. 会場の様子

特別展報告

「2016年の自然遊学館の出来事」

特別展「2016年の自然遊学館の出来事」

～1年の始まりはスナメリの漂着からでした～



場所：貝塚市立自然遊学館多目的室
期間：2017年3月1日(水)～4月9日(日)

貝塚市二色町自26-1 水鉄バス「市民の森」バス停下車徒歩1分
Tel. 072-431-8457 火曜日は休館日です。ご注意ください。

貝塚市内の1年分の生物記録や自然遊学館の行事を振り返る特別展は、2011年から始まり今回で6回目になります。2016年は

その後、自然遊学館の記録として「貝塚初」というのが幾つかありましたが、本誌の寄贈コーナーで紹介してきたように、皆さまから寄せられた標本や写真が多々ありました。例えば、自然遊学館がこれまでに記録してきた貝塚市の植物は約1,120種でしたが、2016年には覚野良子さんからの情報によって、新たに20種ほどがリストに加わることになりました。生きものに関する絵や作品の寄贈もありました。それらすべてを紹介するスペースは狭い館内にはないですが、大型モニターを使ってスライドショーを作製するなど工夫をしています。

以下に展示内容の一部を紹介します。前回までは、生物記録と行事を分けて紹介してきましたが、今回は1月から12月まで同じ列に並べました。図2には、例として、7月から8月上旬の箇所を示しました。この中で、ムラサキホコリの仲間、千石荘に置かれただんじりの駒から生えた変形菌(粘菌)です。



図2. 生物記録と行事報告の展示の例

- 7月3日 二色の浜アマモ場観察
- 7月21日 ムラサキホコリの仲間、千石荘
- 8月5日 ジャノメガザミ 二色の浜
- 8月5日 貝塚科学の日 二色の浜、遊学館

2016年の生物記録のうち、これまで本誌で紹介していなかったものを3つ書き出してみました。

9月5日 コナギ (ミズアオイ科)

8月3日に自然生態園「トンボの池」で初めて記録した植物です。水田などに生えるもので、花が咲いていないと、オモダカに少し似ています。日に日に株が増えて行き、9月5日に初めて1輪咲きました(図3)。昆虫は新しい種の移入がないのに、植物はチョウジタデも新しく入ってきて、動きがある年になりました。



図3. コナギ

10月20日 ヒバカリ (ナミヘビ科)

蕎原の小川に沿った細い道に積もった落葉の上にいました。首の部分に薄黄色の筋模様が入るのが特徴です。館に持ち帰って調べると、大阪府レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されていることが分かりました。市内にすむへびの中で絶滅危惧のランクが一番高かったんですね。魚やカエルを好むので、餌やりは大変そうです。撮影後、同じ場所に逃がしに行きました(図4)。



図4. ヒバカリ

10月27日 ヒラフスベ (タコウキン科)

水間公園で、何か大きなキノコはないかなと探していた時、ヤマモモの根元で見つけました。幅20cmは、この種としては最大級のようなようです。こんなに大きくても薄黄色は完全には成熟していない成長段階で、だんだんと色が茶褐色から暗褐色へと変わっていくそうです(図5)。



図5. ヒラフスベ

スナメリの剥製、1月から12月までの生物記録と行事の紹介、スライドショー、寄贈資料（西村恒一さん寄贈のチョウ類標本や丸山幸代さん寄贈の貝類標本、林秋月さんの鳥の写真）、鈴子佐幸さん作製のビーズすなめりや青木泰彦さんのゼンタングル絵画などの寄贈作品のほか、自然遊学館のスタッフが撮影した動物の画像を素に、遊学館ぬり絵を18セット用意し、会場の一角に設けたぬり絵コーナーで楽しんでもらいました（図6）。

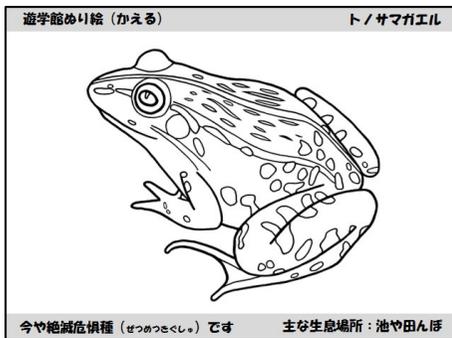


図6. 遊学館ぬり絵—トノサマガエル

生物記録やスライドショーの画像リストなどを含む詳しい報告は、自然遊学館ホームページの過去の特別展のページ (<http://www.city.kaizuka.lg.jp/>)

shizen/tenji/kako_tokubetuten.html) において行う予定です。

(岩崎 拓)

 調査速報

貝塚市二色の浜と
近木川周辺の鳥調査 4

1年間（2016年度）の調査で二色浜公園周辺と近木川河口周辺で毎回見られた野鳥は、ドバト、ハシボソガラス、スズメ、ハクセキレイの4種類でした。

今回は、1月～3月までの野鳥調査報告の表になっています。

二色の浜公園周辺において2017年1月～3月に観察された鳥類					
目	科	種	2017年		
			1月	2月	3月
			25日 13:30	25日 13:30	22日 13:30
目	科	種	鈴子	鈴子	鈴子
カモ目	カモ科	ヒドリガモ	○	○	○
		カルガモ	○	○	○
		オナガガモ	○	○	○
		コガモ	○	○	○
		ホシハジロ	○	○	○
		スズガモ	○		
カイツブリ目	カイツブリ科	カンムリカイツブリ	○		
ハト目	ハト科	キジハト	○	○	○
		ドバト	○	○	○
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○
ペリカン目	サギ科	ダイサギ	○		
		コサギ		○	○
チドリ目	チドリ科	ケリ	○	○	○
		シロチドリ	○	○	○
		ハマシギ	○	○	○
		セグロカモメ		○	
タカ目	タカ科	トビ		○	○
フッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	○		
スズメ目	モズ科	モズ	○	○	○
		ハシボソガラス	○	○	○
	カラス科	ハシボソガラス	○	○	○
		ハシトガラス	○		
	ヒバリ科	ヒバリ	○		
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○
	メジロ科	メジロ	○	○	○
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○
	ヒタキ科	シロハラ	○	○	
		ツグミ	○	○	○
		ジョウビタキ	○		
		インビヨドリ			○
	スズメ科	スズメ	○	○	○
		ハクセキレイ	○	○	○
	セキレイ科	セグロセキレイ			○
		ピンズイ			○
	アトリ科	カワラヒワ	○		○
種数			28	22	27



ビンズイ (二色の浜公園 2017年3月22日)

1年間のまとめは貝塚市立自然遊学館報に掲載する予定になっています。

(鈴子 勝也)

千石荘昆虫調査 2016

貝塚市千石荘において 2016年4月から12月までの各月に1回ずつ3時間程度の昆虫調査(ルートセンサス・任意調査)を行いました。速報とは言えないほど遅れてしまいましたが、その結果、および以前の記録との比較を報告します。

1. 大阪府レッドリスト種

2016年の調査では、『大阪府レッドリスト2014』の指定種として、いずれも準絶滅危惧のベニイトトンボ、キイトトンボ、ウチワヤンマ(図1)、ナツノツヅレサセコオロギ、ウスアオリングが確認されました。

キイトトンボは毎年、ベニイトトンボもほぼ毎年確認されています。ウチワヤンマは2014年の大阪府レッドリストの改訂で、ランク外から新たに準絶滅危惧に指定されましたが、それ以前からも千石荘では記録がありました。

ナツノツヅレサセコオロギは鳴き声による確認で、今年も採集できず、いまだに自然遊学館に標本はありません。ウスアオリングは、2015年に初めて確認されて、今年も確認されました。幼虫の餌植物はアキニレです。

近木川河口周辺において2017年1月～3月に観察された鳥類			2017年		
目	科	種	1月	2月	3月
			11日	19日	8日
			13:20	13:30	13:25
			鈴子	鈴子	鈴子
カモ目	カモ科	ヒドリガモ	○	○	○
		カルガモ	○	○	○
		オナガガモ	○	○	○
		コガモ	○	○	○
カイツブリ目	カイツブリ科	ホシハジロ	○	○	○
		カイツブリ	○		
ハト目	ハト科	カンムリカイツブリ	○	○	
		キジバト	○	○	○
カツオドリ目	ウ科	ドバト	○	○	○
		カワウ	○	○	○
ペリカン目	サギ科	アオサギ	○	○	○
		ダイサギ	○	○	○
		コサギ	○	○	○
		オオバン	○	○	○
ツル目	クイナ科	クイナ	○	○	○
チドリ目	チドリ科	ケリ	○	○	○
	シギ科	イソシギ		○	
	ハマシギ		○		
タカ目	カモメ科	セグロカモメ	○	○	
	ミサゴ科	ミサゴ	○	○	
タカ目	タカ科	トビ	○	○	○
	カワセミ科	カワセミ	○	○	
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	○	○	
スズメ目	モズ科	モズ			○
	カラス科	ハシボソガラス	○	○	○
		ハシブトガラス	○	○	○
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○
	メジロ科	メジロ	○	○	○
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○
	ヒタキ科	シロハラ	○	○	○
		ツグミ	○	○	○
		ジョウビタキ		○	○
		インビヨドリ		○	○
	スズメ科	スズメ	○	○	○
	セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○
		セグロセキレイ	○	○	○
アトリ科	カワセウ	○	○	○	
ホオジロ科	カシラダカ	○	○	○	
	アオジ	○	○	○	
種数			27	30	27



カシラダカ (近木川河口 2017年3月8日)



図1. ウチワヤンマ (♂)
(トンボ目サナエトンボ科、2016. 7. 2)

アカトンボの仲間では、ナツアカネが2005 年を最後に確認が途絶えていることが気掛かりです。自然遊学館に所蔵されているナツアカネの標本も、ほとんどは1990年代のもので、2000年以降のものは少なく、貝塚市全体を見ても、2006年が最後の標本になっています。

2. 注目種

今後も調査を続けて、千石荘の里山的環境の指標となるような種を選んでいきたいと考えています。

2015年調査で確認された種は、カントン、ショウリョウバッタモドキ、カブトムシ、ニッポンヒゲナガハナバチです。

2015年の速報(本誌81号)で、2014年と2015年に確認されなくなったのが心配だと書いたハチモドキハナアブは、今年もクヌギの樹液まわりで確認されませんでした。また、同じく2013年が最後の確認となっていて今年も確認されなかったナフシモドキも、新たに注目種に加えました。

3. その他

これまで自然遊学館に標本がなく、今回の調査で採集された種は、ケヤキヒトスジワタムシ、モンキノメイガ、チズモンアオシヤク、ナメクジハバチ属の一種の幼虫

(図2)でした。ケヤキヒトスジワタムシはいわゆる「雪虫」と言われているものです。ナメクジハバチ属の一種の幼虫は、止まっていた植物が餌ではないらしく、飼育をあきらめました。



図2. ナメクジハバチ属の一種の幼虫
(ハチ目ハバチ科、2016. 7. 2)

最後に、2016年調査の速報として紹介した種の確認日(月/日)を示しました。*印は幼虫での確認、その他の無印は成虫での確認です。

大阪府レッドリスト種(準絶滅危惧)

ベニイトトンボ 8/2

キイトトンボ 6/2、7/2、8/2、9/6

ウチワヤンマ 7/2、8/2

ナツノツヅレサセコオロギ 6/2、7/2

ウスアオリンガ 12/1

注目種

カントン 11/3

ショウリョウバッタモドキ 8/2、9/6、10/4、

11/3

カブトムシ 8/2、11/3*、12/1*
ニッポンヒゲナガハナバチ 4/12
自然遊学館に標本がなかった種
ケヤキヒトスジワタムシ 12/1
モンキノメイガ 8/2
チズモンアオシヤク 6/2
ナメクジハバチ属の一種 7/2*

参考文献

『大阪府レッドリスト2014』（大阪府、2014）

(岩崎 拓)

 寄贈標本

<菌類>

- ◆西出康介さんより
タコウキン科の一種 1点
貝塚市脇浜 2017年3月3日
カワラタケの生えた材 2点
タコウキン科の一種が生えた材 1点
岸和田市上白原町
2017年3月22日採集

<植物>

- ◆伊瀬天河さんより
ココヤシの実 打ち上げ1点
貝塚市二色の浜 2017年2月4日

<哺乳類>

- ◆常道武士さんより
ヒミズ 死体1点
貝塚市橋本 2017年3月13日採集

<鳥類>

- ◆久保元嗣さんより
オオルリ 死体1点
大阪府立少年自然の家（貝塚市木積）
2016年5月17日採集
セグロセキレイ 死体1点
大阪府立少年自然の家（貝塚市木積）
2017年1月11日採集
- ◆佐々木敏夫さんより
ミサゴ 死体1点
貝塚市麻生中 2017年3月6日採集
- ◆西浦勇太さんより
メジロ 巣1点
貝塚市馬場 2017年3月22日採集

<魚類>

- ◆川口博さんより
シマフグ 打ち上げ死体1
貝塚市二色の浜 2017年1月25日採集
- ◆常道武士さんより
ウキゴリ 生体1点
ドジョウ 生体3点
モツゴ 生体1点
タモロコ 生体3点
カワヨシノボリ 生体1点
貝塚市橋本近木川 2017年3月4日採集
ウキゴリ 生体2点
貝塚市橋本近木川 2017年3月22日採集

<軟体動物>

- ◆川口博さんより
テナガダコ 打ち上げ1
貝塚市二色の浜 2017年2月2日採集



テナガダコ
(二色の浜打ち上げ 2017年2月2日)

- ◆丸山幸代さんより
スガイ 打ち上げ3 ほか数点
二色海浜緑地 2017年1月28日採集
タイラギ 打ち上げ1
二色海浜緑地 2017年2月11日採集
イソシジミ 打ち上げ2
シオサザナミガイ科幼貝 打ち上げ1
キヌタアゲマキ 打ち上げ1 ほか数点
貝塚市二色の浜 2017年2月15日採集
フドロガイ 打ち上げ1
カゴメガイ 打ち上げ1
アシヤガイ 打ち上げ1 ほか数点
貝塚市二色の浜 2017年2月21日採集
ハナゴショグルマ 打ち上げ5
キヌボラ 打ち上げ3
オガイ 打ち上げ2 ほか数点
貝塚市二色の浜 2017年2月26日採集
オチバガイ (軟体有) 打ち上げ1
テングニシ 打ち上げ1
テンガイ 打ち上げ1 ほか数点
貝塚市二色の浜 2017年2月27日採集
ハボウキ 打ち上げ1
ミドリイガイ 打ち上げ1 ほか数点
貝塚市二色の浜 2017年3月15日採集
クダタマガイ 打ち上げ1

- ニシキガイ 打ち上げ1
貝塚市二色の浜 2017年3月22日採集
オチバガイ 打ち上げ1
貝塚市近木川河口 2017年3月30日採集
- ◆常道武士さんより
ナミマイマイ 殻1点
貝塚市橋本 2017年3月24日採集

<環形動物>

- ◆丸山幸代さんより
ムギワラムシの棲管の一部 1点
生態写真 3枚
貝塚市二色の浜 2017年2月27日採集

<甲殻類>

- ◆丸山幸代さんより
タイワンガザミ 打ち上げ死体1
二色海浜緑地 2017年1月28日採集
キンセンガニ 打ち上げ死体1
貝塚市二色の浜 2017年2月12日採集
キンセンガニ 打ち上げ死体1
貝塚市二色の浜 2017年2月27日採集
- ◆常道武士さんより
モクズガニ 生体1点
貝塚市橋本 2017年3月24日採集

<棘皮動物>

- ◆丸山幸代さんより
トゲモミジガイ4腕個体 打ち上げ死体1
貝塚市二色の浜 2017年1月21日採集
イトマキヒトデ 打ち上げ死体3
ムラサキウニ 打ち上げ死体2
二色海浜緑地 2017年1月28日採集
モミジガイ 打ち上げ死体1
貝塚市二色の浜 2017年2月12日採集

<寄贈写真>

◆廣野光子さんより

ヤマドリ羽根 1枚

貝塚市蕎原本谷 2016年4月11日撮影

◆藤村雅志さんより

ビロードキンクロ 4枚

クロガモ 2枚

近木川河口 2017年1月2日撮影



ビロードキンクロ

(近木川河口 2017年1月2日 藤村雅志氏撮影)

◆久保元嗣さんより

ニホンザル 5枚+動画1点

貝塚市馬場 2017年1月13日撮影



ニホンザルみ

(貝塚市馬場 2017年1月13日 久保元嗣氏撮影)

◆覚野良子さんより

アケボノシュスラン 1枚

コショウノキ 1枚

ナツトウダイ 1枚

クワガタソウ 1枚

フデリンドウ 1枚

ミヤマウズラ 1枚

オオアカゲラ 2枚 ほか9枚

和泉葛城山 2017年1月22日撮影



ナツトウダイ

(和泉葛城山 2017年1月22日 覚野良子氏撮影)

バン 1枚

カワセミ 1枚

ルリビタキ 1枚

ノスリ 2枚 ほか10枚

貝塚市千石荘 2017年1月25日撮影

イソヒヨドリ 1枚

トビ 1枚

メジロ 1枚

ケリ 1枚

ハマシギ 1枚

近木川河口 2017年2月20日撮影

ユキワリイチゲ 10枚

貝塚市蕎原 2017年3月19日撮影



ユキワリイチゲ

(貝塚市蕎原 2017年3月19日 覚野良子氏撮影)

◆林秋月さんより

主に鳥画像 222枚

2017年2月2日寄贈

ハシビロガモ 4枚

ツグミ 2枚

貝塚市澤 2017年2月8日撮影

◆秋武仁志さんより

カンムリカイツブリ 1枚

近木川河口 2017年3月19日撮影

<目撃情報>

◆食野俊男さんより

ツバメ 1羽

貝塚人工島 2017年3月27日目撃



スタッフ日誌

1月10日、スナメリの剥製を作って頂いている京都の西尾製作所からもうすぐ完成との連絡を受け、剥製製作の取材を兼ねて仕上がりを見に行ってきました。二色海浜緑地の波打ち際に打ち上げられていたのが、息を吹き返したかのような姿がそこにありました。(高・岩・山)

2月16日、大阪府岸和田土木事務所から委託を受けて実施している近木川河口の汽水ワンドでのモニタリング調査も5年の期間を迎えました。そこで、5年間でどのような生物が出現したかの推移等について、まずは委託先で報告会を行いました。5月には地元で市民向けにも報告会を行う予定です。(山・岩)

3月9日、二色の浜公園管理事務所の方が二色小学校6年生52名と一緒に松に巻いたコモを外してどんな生きものがあるのかを調べる授業に参加しました。コモ巻き第一の目的であるマツカレハの幼虫は少なく、メガネヤチグモが一番多いという結果は、これまでと同じでした。ラクダムシの幼虫がいたのも同じです。でも、これまでと比べて、種数と個体数ともに少なく、もしかしたら1月と2月の少雨が影響したのかもしれない。(岩)

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2017 春号 (No. 83)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2017. 4. 30

この小冊子は庁内印刷で作成しています。